九州産業大学国際文化学部紀要　第70号　1－19（2018）

三吉朋十と土俗学

森　谷　裕美子

目次

はじめに
1　「土俗」という用語
2　三吉朋十の生涯とその研究
3　フィリピンでの土俗研究
おわりに

はじめに

人類学を学ぶため1889年に英・仏へ留学した坪井正五郎は、ここで学んだ新しい学問としての「人類学」を日本に紹介するなかで、自らが中心となって運営していた東京人類学会の機関誌『東京人類學會雑誌』[1]上で、その用語の「Ethnoligie（イギリス語ではEthnology）を人種学と訳しEthnographie（イギリス語ではEthnography）を之と区別する為に人種誌又は土俗学」と訳した。そして「人種学に於いては一群の人類の諸性質をば他群の人類の諸性質に比較するのを肝要」とするが、土俗学においては「広い狭いに関せず一地方一地方の風俗習慣」を調べることがその目的であるとした〔坪井 1890a：100、1893：427-428〕。しかし坪井自身、これを定訳としたわけではなく、同時に「エトノロジィもエトノグラフィも人に因って色々異なった意味に用いて居るので二語が同意と成る事も有り別意と成る事も有り場合によって訳さなければ成らぬ」と述べており〔坪井 1890a：100〕、後に、民俗学と土俗学は同じであるとしたり、Ethnographyを土俗研究と訳したりもした〔坪井 1890b：376、1895：464〕。このような人類学の日本語訳をめぐる揺らぎのなかで、大正期には「民族」という語彙が広まっていき、「土俗学」「文化人類学」「民族学」という名称をめぐっての論争が行われた〔山路 2011：26-30〕。

坪井正五郎の帰国後、国内では坪井の周辺の研究者が日本の民俗に関心を寄せるよ

うになるが、日本が植民地を獲得すると、当時の日本政府の統治政策と連動して人類学者たちの興味が国内から「珍しい習俗」をもつ国外へと移っていき、とりわけ台湾や朝鮮半島、中国大陸、南洋諸島が研究の対象として注目を集めるようになっていったという。本稿でとりあげる三吉朋十は、こうした動きから少し遅れて南洋、とりわけフィリピンの「土俗研究」を行ったが、そのいっぽうで日本の民俗にたいする「土俗」という表現は、1900年代になって『東京人類學會雑誌』の目次から姿を消していったという〔佐谷 2015：47〕。

そこで本稿では、このような状況において三吉がなぜフィリピンで土俗の調査を行い、そこから、どのように「土俗学の権威」となっていったのかについて、「土俗」という用語のもつ政治性とアジア太平洋戦争との関係性から明らかにする。

1　「土俗」という用語

「土俗」とは一般に「その土地の住民」や「その土地の風俗」を指すが、先に述べたように、坪井はこの用語をEthnographyの訳語として用いた。そして、この土俗調査、すなわち「何所の住民は如何なる風俗であるか、何所には如何なる習慣が存するか」を調べることは、「單に奇事珍談を知ると云ふ慰みたるに過ぎない」のではなく、土俗調査には ①ある地域の人々について語る時にはその地域の風俗習慣を知ることが重要であり、一つの出来事にたいしても地域によって考えが異なるから、これを比較すればその真相が分かる。②他地域にどのような風俗習慣があるのかを知っていれば、自分たちと異なる風俗や習慣を聞いても頭から疑って否定することがなくなる。③ある地域で見られる風俗習慣の意味が分からなくても、他の地域で集めた事例と比較することでその起源や変遷が推測できる、という3つの利益があるとした〔坪井 1894：170-171〕。

いっぽう相馬は、明治期になってアイヌが「土人」と称されることになったことと連動して「土俗」という用語が「いわゆる「土人」と称されていた、独自の狩猟採集社会の習慣や文化全般を指し示す「土人の俗」として再定義」されるようになったが、この「土俗」という表現は「日本や欧米の文化・社会を対象に用いられた「民俗」や「風俗」とは意識的に区別され、ふたつの表現がひとつの社会・文化に混合して用いられることはなかった。つまり「土俗」と「民俗」とは、それぞれの用語が適応される対象社会によって、「近代」の評価基準にもとづく一定の高低差が存在していた」と指摘する〔相馬 2010：620〕。中村はこの「土人」にかんして、坪井が初めてEthnographie（Ethnography）の訳語として「土俗学」を提唱した『東京人類學

會雑誌』[2]の『人類学雑誌総索引第１～50巻（1886～1935年)』にあげられている論文題目をもとに、どのような地域を対象にどのような述語が使われているかを明らかにしたが、それによると、この期間、「土人」を表題にかかげる論文は計60本で、そのほとんどは1921年の南洋群島委任統治までに限られており、その地域も最多の太平洋島嶼部が約半数、それに日本本土周辺の植民地が続くという。いっぽう「土人」にたいして、同じような意味合いを含む「蕃人」「蕃族」「生蕃」「土蕃」といった用語もみられるが、明治期を通じて、台湾地域にかんしては先の「土人」よりも、これらの用語を使用するのが一般的だったという〔中村 2001：109-113〕。

佐谷は、そもそも日本の人類学者が初めて日本へ持ち込んだ「土俗学」は、イギリスの社会人類学者のタイラーの影響を受けた「未開民族」を対象とする学問で、そこにはタイラーによる進化主義的な文化観と、調査対象を「未開」と位置付ける差別的な視点が潜在していたことを指摘し、そこで日本が日清戦争の勝利によって台湾を領有し、そこに住む清国の統治に服さない「生蕃」として恐れられていた先住民族が当時の人類学者の格好のフィールドとなって、これによって台湾だけでなく、朝鮮半島や中国大陸、南洋諸島も研究の対象として注目を集めるようになっていったと指摘する〔佐谷 2015：44-46〕。

本稿でとりあげる三吉朋十もまた、この「土俗研究」にかかわり、戦前、戦中に多くの土俗にかんする業績を残したが、三吉自身は大学で生物学を学んだだけで、実際には正式な民族学者（人類学者）としての教育を受けていない。しかし「実地の踏査に従うこと数回。尋常一様机上の研究と自ら其の撰を異にするのみでなく。夙に南方に在住して広く南方の実情に通ぜる篤学にして然かも実践に依る」[3]といった彼の調査方法からみると、彼はまさしく「土俗研究者」であるといえなくもなく、実際、彼の論文には多くの「高山蕃〔三吉 1938〕」があつかわれている。

２　三吉朋十の生涯とその研究

台湾総督府に提出された三吉朋十の履歴書〔台湾総督府档案第10252冊第10件第４張〕[4]と、小川氏による記述〔小川 1984：176〕を総合すると、三吉の生涯は次のようである。

1882年：札幌市で生まれる（本籍 豊島区雑司ヶ谷）
1901年：仙台南光学園卒業
同　年：札幌農学校（1918年に北海道帝国大学に改名）入学、生物学専攻
1905年：病気のため退学

同　年：学術研究のため渡比（昆虫の採集）
1906年：三井物産香港駐在員（1908年まで）
1909年：帰国
1912年（1911年？）：株式会社南亜公司に入社してマレー半島に渡り、ジョホールのトロスンガの現場主任を務める
1918年：帰国
1919年：南洋協会嘱託
インド、ビルマ等へ赴く
1932年：台湾総督府嘱託としてスンダ、チモール、ジャワ、セレベスへ
1937年：台湾総督府嘱託（総督官房調査課勤務）として南洋における制度および経済調査を行う
1937年：台湾総督府の派遣で渡比

ただし三吉の生涯については、この台湾総督府に提出された履歴書（以後：履歴書）の内容と、ここで参照した小川氏の記述、あるいは自身の著作や講演のなかで語ったもの、著者・講演者紹介に書かれていたものとでは若干の齟齬があり、またそれぞれの著書で部分的に語られていることも多いため、ここではこの履歴書をベースに三吉氏の生涯について補足することにしたい。

まず最初に確認しておきたいのは、履歴書では三吉は大学を退学したことになっているが、それ以外には卒業したと述べているものの方が多く〔三吉 1942b：1、1942i：45、小川 1984：176〕、真偽は不明であるが、1905年に初めてフィリピンに渡ったのは事実のようである。ただし研究のためとあるが、その主な目的は昆虫採集であったようだ〔三吉 1942b：1、1942j：37〕。その後、1911年に森村財閥の創設者である森村市左衛門に招かれてマレー半島で５年間ゴムの栽培をしたらしい〔三吉 1940：39、1942k：103-104〕。履歴書にある南亜公司は、戦前日本の海外・移民事業のパイオニアの一人井上雅二の意見で1911年に森村市左衛門が創業したものであり〔丹野 2017：159〕、その後、三吉はこの井上と深くかかわることになる。また、出所は定かではないが、日本のゴーギャンと呼ばれる土方久功が戦前、この三吉氏と交流があったようで、土方の日記にも三吉が登場するが、その注釈での三吉の説明には「探検家、研究者。明治15年（1982）、北海道生まれ。札幌農学校卒。マニラに渡航し、昆虫採集。三井物産香港駐在員等を経、第１次大戦中は、インド、ビルマを旅行。ジャワ島ニラバヤ（筆者注：スラバヤのことと思われる）市に４年居住。昭和７年（1932）、台湾総督嘱託としてチモール方面、ジャワ、バリ、昭和12年（1937）、ルソン、バラ

ワン島に旅行」とある[5]〔土方・須藤・清水 2014：562〕。

海外調査にかんしては（表2）[6]、「南方諸地域はほとんど総て歩いている」と自負するように〔三吉 1942f：2〕、初めてフィリピンへ渡った1905年以降、フィリピン各地、台湾、マレー半島、ジャワ島、バリ島、チモール島、セレベス島、ビルマ、インド等、南方各地を訪ねており、「赤道を超えること10余回に及び、台湾へは５回」渡ったという〔小川 1984：176〕。三吉がこうした経験にもとづき1916年に『実業の世界』に書いた「南洋貿易の有望品」には、南洋ではどのような日本の商品が好まれるかについて述べられているが、この筆者の紹介文で三吉は「一昨年以来、一年半□地を視察し、此頃帰った人である。氏の周到なる研究と、□厚な観察は、其処らにありふれた視察団などと一緒に見てもらっては困る」と書かれており、その内容から見ても、このころからすでに三吉が「南洋人」の暮らしに関心を持っていたことがわかる〔三吉 1916：47〕。ただし、小川によると、彼が特に「民俗研究」に関心をもつようになったのは50歳を過ぎてからのことで、それまでは南洋との貿易に従事していた〔小川 1984：176〕。

三吉および三吉にかんする業績一覧（表1）[7]にもとづき、そこに記載されていた当時の三吉氏の肩書をみてみると、最初の方に「大倉孫兵衛商店南洋係」とか「極東護謨株式会社代表社員」といったものがあるほかは、ほとんどが南洋協会、南洋経済研究所の嘱託である（表2）。このことから、最初は「探検家」だった三吉が南洋協会、南洋経済研究所、台湾総督府などの調査・研究機関とかかわりをもつようになり、それをバックグラウンドとして土俗調査をおこない、やがて土俗研究の権威としての地位を獲得し、その成果が太平洋協会、日本南方協会、井上雅二民族政策研究所などから多数出版されるようになったことがわかる。

表１　三吉朋十および三吉にかんする戦前の業績一覧

No.	タイトル	雑誌名・編者等	出版年	出版社等 ＊肩書
1	南洋貿易の有望品	『実業の世界』13(20)：47-51、三田商業研究会	1916.10	実業之世界社 ＊大倉孫兵衛商店南洋係
2	寶庫の國印度の最近事情	『実業の日本』21(26)：25-27、大日本実業学会	1918.12	実業之日本社
3	南洋の宗教	『南洋協会講演集』南洋研究叢書第７篇：229、南洋協会編	1922	南洋協会 ＊極東護謨株式会社代表社員
4	赤道に沿うて	『趣味の旅 ラヂオ講演』3-11(171)、日本放送協会関東支部 編	1928	日本放送協会

5	風俗習慣、小スンダ列島、モルッカ諸島	『世界地理風俗大系』第４巻 南洋	1929.3	新光社
6	今と昔の南洋探險	『変つた実話』21、朝日新聞社 編	1929	東京朝日新聞 ＊南洋協会嘱託
7	セレベス島の蠻族	『植民』９(10)：64-65、日本植民通信社 編	1930.10	日本植民通信社 ＊南洋協会嘱託
8	熱帯の栽培物はまず米作から	『植民』９(11)：104-115、日本植民通信社 編	1930.10	日本植民通信社 ＊南洋協会嘱託
9	トンボ玉：一名珞珠		1932	南方土俗文化研究会
10	南洋土人の奇習	『海外』12月號(12)(70)：79-85	1932.12	海外社
11	南洋土人奇譚（其二）	『海外』新年號(13)(71)：105-111	1933.1	海外社
12	南洋土人奇譚（其三）	『海外』２月號(13)(72)：64-69	1933.2	海外社
13	南洋膝栗毛	『植民』12(9)：154-159、日本植民通信社編	1933.9	日本植民通信社
14	南洋女さまざま―比律賓・爪哇・ニユーギニア	『植民』12(12)：100-103、日本植民通信社編	1933.12	日本植民通信社
15	セレベス／小スンダ諸島／モロッカス諸島	『地理講座 外国篇』第３巻（南部アジヤ）：379-385、386-393、394-397、改造社 編	1934	改造社 ＊南洋協会嘱託
16	卍字と巴との起源考 上篇		1934	三吉朋十
17	卍字と巴の起源考 中篇		1935	三吉朋十
18	比律賓蛮族の実生活	南洋協会講演速記（全35頁）	1936	南洋協会
19	南洋土人の珍しい風習	『日本少年』31(5)：74	1936.5	実業之日本社
20	馬来化した梵語と日本化した南洋語		1936	三吉朋十
21	人魚と鱶鮫	『南洋水産』３(3)(22)：33-37	1937.3	南洋水産協会
22	南洋よいとこ黄金の實がなる	『東方之国』第11年(8)：40-43	1937.6	東方之国社
23	南洋水産綺談	『南洋水産』３(7)(26)：31-38	1937.7	南洋水産協会
24	比律賓の山岳地帶	『海』７(8)(71)：21-23、大阪商船株式会社 編	1937.8	＊南洋の研究家
25	卍字と巴の起源考 下篇		1937	三吉朋十
26	イフガオの神祕境	『デルタ』２(7)：88-91	1938.7	古今書院
27	サロンとスレンダン	『海を越えて』６(1)：28-34	1938.1	日本拓殖協会
28	パラワン島の旅（一）	『南洋水産』４(1)(32)：53-61	1938.1	南洋水産協会
29	パラワン島の旅（三）	『南洋水産』４(3)(34)：43-49	1938.3	南洋水産協会

30	パラワン島の旅（完）	『南洋水産』4(4)(35)：56-59	1938.4	南洋水産協会
31	日比国交と呂宋壷		1938	三吉朋十
32	比律賓の高山蕃を語る	南洋懇話会 速記録：7-46、南洋懇話会	1938	＊南洋協会嘱託
33	目次カツト寫眞・南洋水産工藝展会場の一部（左・三吉朋十氏出品）	『南洋水産』5(1)(44)	1939.1	
34	熱帯太平洋諸島に於ける宗教進出現勢（上）	『南洋経済研究所研究資料』第2年(9)：35-45	1939.9	南洋経済研究所
35	熱帯太平洋諸島に於ける宗教進出の現勢（下）	『南洋経済研究所研究資料』第2年(10)：79-90	1939.10	南洋経済研究所
36	南洋蕃人の頚飾玉珞珠		1939	日本探検協会
37	パラワン島の古代文字	『東京人類學會日本民族学会聯合大会紀事』第1回一般講演抄録：126-128	1939	東京人類學會・日本民族学会聯合大会
38	紅頭嶼に漂着せる刳舟	『東京人類學會日本民族学会聯合大会紀事』第3回一般講演抄録：66-68	1939	東京人類學會・日本民族学会聯合大会
39	龍と蜥蜴（一）	『南洋水産』6(1)(56)：54-59	1940.1	南洋水産協会
40	龍と蜥蜴（完結）	『南洋水産』6(2)(57)：54-59	1940.2	南洋水産協会
41	フィリッピン文化の變遷	『新亜細亜』13(4)：26-37、南満州鉄道東亜経済調査局	1940.4	
42	南方共榮圏と日本民族の發展	『東洋貿易研究』19(12)：25-46、大阪市産業部東亜課 編	1940.12	大阪市産業部 ＊南洋経済研究所
43	列强侵略と移住民族の動靜	『動く大南洋の実相』85-107、報知新聞社南方調査会 編	1940	高山書院 ＊南洋経済研究所
44	波騒ぐ南方の問題を語る座談会（大宅由耿、小里玲、關根郡平、西原龍夫、三吉朋十）	『婦人倶楽部』22(2)：38-45、大日本雄弁会	1941.2	講談社
45	歴史に残された比島華僑の動亂	『南洋経済研究所研究資料』第3年(4)：42-53	1941.4	南洋経済研究所
46	東亜共栄圏と比律賓	井上民族政策研究所研究叢書第1輯	1941.7	刀江書院
47	新刊紹介：三吉朋十氏近著「東亞共榮圏と比律賓」	『南洋経済研究所研究資料』第4年(8)：53	1941.8	南洋経済研究所
48	世界の謎ニューギニア、パプア風物	『実業の日本』44(18)(1051)：26-29	1941.9	
49	比律賓群島の標準語	南洋資料第8号	1941	南洋経済研究所
50	比律賓	大南洋地名辭典第1巻南洋経済研究所編	1942.1	丸善 ＊南洋経済研究所嘱託

51	比島攻略の戰蹟	『興亜』3(2)：86-100	1942.2	大日本興亜同盟
52	大東亞南方圏の住民	『生活科學』 2 月號(2)：48-53、国民生活科学化協会 監修	1942.2	東京日日新聞社
53	「東亞共榮圏確立の原理」座談会（伊東敬、金内良輔、高島佐一郎、寺田彌吉、三吉朋十、宮本誠（三）	『文芸春秋』20(2)：80-100	1942.2	文芸春秋社
54	比律賓地名辭典の刊行に就いて	『學鐙』46(2)：24-25、學鐙編集室 編	1942.2	丸善出版株式会社
55	皇軍制壓下のフイリッピン風物	『実業の日本』45(3)(1059)：48-49	1942.2	
56	ジヤバ島民の部落習俗	『興亜』3(3)：115-120	1942.3	大日本興亜同盟
57	西南太平洋の文化運動	『農村文化』21(4)：45-49	1942.4	農山漁村文化協会
58	南洋諸島の民族文化	『産業之日本』16(4)：35-37	1942.4	名古屋経済研究所
59	南方關係書解題（一）	『學鐙』46(4)：23-24、學鐙編集室 編	1942.4	丸善出版株式会社
60	座談会：ジャヴァを中心に･蘭印の全貌を語る（堤不二男、町田泰作、増田要、齋藤文也、三吉朋十、宮島克）	『実業の日本』45(7)(1063)：30-39、大日本実業学会	1942.4	実業之日本社
61	南の印象バリ島	『実業の日本』45(8)(1064)：42-43	1942.4	
62	南洋動物誌		1942.5	モダン日本社
63	南方關係書解題（二）	『學鐙』46(5)：20-21、學鐙編集室 編	1942.5	丸善出版株式会社
64	南方關係書解題（三）	『學鐙』46(6)：25-26、學鐙編集室 編	1942.6	丸善出版株式会社
65	支配階級の民族	『フィリッピンの自然と民族』第 2 部 民族、太平洋協会 編	1942.6	河出書房
66	大東亞共榮圏內の民族	『日本と世界』(188)：1-42	1942.6	文明協会
67	南方メモ：チモール・クーパン	『報道寫眞』 2(6)：20	1942.6	寫眞協会
68	南方關係書解題（四）	『學鐙』46(7)：24-25、學鐙編集室 編	1942.7	丸善出版株式会社
69	南方關係書解題（五）	『學鐙』46(8)：26、學鐙編集室 編	1942.8	丸善出版株式会社
70	パラワン・チモール・セレベス探検記		1942.8	刀江書院
71	比律賓の土俗		1942.8	丸善

72	南洋開拓秘史ニューギニヤ探險記	チャンピオン著	1942.8	旺文社
73	南方の文化と生活	『工芸ニュース（Industrial art news）』11(8)：322-325、商工省工藝指導所 編	1942.9	工業調査協会 ＊南洋経済研究所嘱託
74	南方民族の分布と交通	『帝國鐵道協会誌』43(9)：53-64、帝国鉄道協会	1942.9	
75	比律賓國名考	南洋資料第61号	1942.9	南洋経済研究所出版部
76	南方の文化と生活（一）	『通商彙報』420：2-7	1942.9	大阪南方院
77	南方關係書解題（六）	『學鐙』46(9)：24、學鐙編集室 編	1942.9	丸善出版株式会社
78	南方關係書解題（七）	『學鐙』46(10)：24、學鐙編集室 編	1942.10	丸善出版株式会社
79	南方の文化と生活(二)	『通商彙報』421：14-27	1942.10	大阪南方院
80	南方の衣食住		1942.10	朝日新聞社 ＊南洋経済研究所嘱託、明治大学講師
81	比律賓民族誌		1942.10	偕成社
82	南方風土記・比律賓	『実業の日本』45(19)(1075)：73	1942.10	
83	比律賓の標準語	『南洋経済研究』5(10)：29-34	1942.10	
84	比律賓の宗教と文化		1942.11	偕成社
85	東印度民族の風習	『少年保護』7(11)：14-23、司法保護協会 編	1942.11	司法保護協会
86	南方關係書解題（八）	『學鐙』46(11)：26、學鐙編集室 編	1942.11	丸善出版株式会社
87	南方關係書解題（九）	『學鐙』46(12)：24、學鐙編集室 編	1942.12	丸善出版株式会社
88	南洋の諸民族に就いて	『経済倶樂部講演』昭和17年(12)：27-45	1942.12	東洋経済新報社出版部 ＊南洋経済研究所
89	南方への指針	『南方を解剖する』9-53、日本学術探検協会、日本学術探検協会 編	1942	元元書房 ＊日本学術探検協会理事長 ＊南洋経済研究所嘱託
90	南方圏の民情土俗に就て	『南方圏の諸問題』3-106、日本護謨輸入組合	1942	日本護謨輸入組合調査課 ＊南洋経済研究所
91	比島事情	『資源開発と其経営南方事情』255-270、日本南方協会 編	1942	日本南方協会
92	フィリピン文化の変遷	『南方亜細亜の文化』新亜細亜叢書４、南満洲鉄道株式会社東亜経済調査局「新亜細亜」編輯部 編	1942	大和書店

93	太平洋諸島伝道事業の概要（前・後）	南洋資料	1942	南洋経済研究所出版部
94	比律文化と標準語	『比律賓情報』第59号：15-20、比律賓協会	1942	
95	フィリッピンはどういふところか		1942	汎洋社
96	第４篇 民族	『南方共栄圏の全貌』319-450、佐藤弘 編	1942	旺文社
97	比島事情	『南方問題十講』210-232、古野清人 編	1942	第一書房
98	土俗篇（一）（二）	「日章旗下の太平洋」『満州日日新聞』	1942	
99	南方關係書解題（十）	『學鐙』47(1)：27-27、學鐙編集室 編	1943.1	丸善出版株式会社
100	南方關係書解題（十一）	『學鐙』47(2)：19、學鐙編集室 編	1943.2	丸善出版株式会社
101	南方叢談	『実業の日本』46(3)(1082)：47-51、大日本実業学会	1943.2	実業之日本社
102	南方關係書解題（十二）	『學鐙』47(3)：23、學鐙編集室 編	1943.3	丸善出版株式会社
103	ミンダナオ農業の將來	『南洋経済研究』6(3)：32-37	1943.3	南洋経済研究所
104	南方關係書解題（十三）	『學鐙』47(4)：20、學鐙編集室 編	1943.4	丸善出版株式会社
105	南方關係書解題（十四）	『學鐙』47(5)：15、學鐙編集室 編	1943.5	丸善出版株式会社
106	南方事情 南方の迷信	『旅』20(5)：24-25、日本旅行協会	1943.5	新潮社
107	南方關係書解題（十五）	『學鐙』47(6)：17、學鐙編集室 編	1943.6	丸善出版株式会社
108	南方關係書解題（十六）	『學鐙』47(7)：17、學鐙編集室 編	1943.7	丸善出版株式会社
109	東印度の土俗		1943.8	日本公論社
110	南方關係書解題（十七）	『學鐙』47(8)：21、學鐙編集室 編	1943.8	丸善出版株式会社
111	南方關係書解題（十八）	『學鐙』47(9)：22、學鐙編集室 編	1943.9	丸善出版株式会社
112	二つの獨立	『興亜』4(9)：68-70	1943.9	大日本興亜同盟
113	比島の精神革命	『興亜』4(10)：48-57	1943.10	大日本興亜同盟
114	南方關係書解題（十九）	『學鐙』47(10)：20、學鐙編集室 編	1943.10	丸善出版株式会社

115	南方關係書解題（二十）	『學鐙』47(11)：19、學鐙編集室 編	1943.11	丸善出版株式会社
116	比律賓の國語と文字	『國際文化』28：86-97、国際文化振興会	1943.11	【比律賓特集】
117	チャンピオン著『南洋開拓祕史 ニューギニヤ探檢記』	『民族學研究』1(11)：1073、中野 弘	1943.11	
118	臺灣とフィリッピンの理蕃政策（一）	『南洋経済研究』6(11)：26-30	1943.11	南洋経済研究所
119	臺灣とフィリッピンの理蕃政策（二）	『南洋経済研究』6(12)：18-23	1943.12	南洋経済研究所
120	南方關係書解題（終）	『學鐙』47(12)：50、學鐙編集室 編	1943.12	丸善出版株式会社
121	フィリッピン文化の變遷	『南方亞細亞の文化』新亜細亜叢書第4：139、南満洲鉄道株式会社経済調査局 編	1943	大和書店
122	外力浸潤の歴史的性格	『西南太平洋』289	1943	毎日新聞社 ＊南洋経済研究所
123	南方事情 南方の迷信	『旅』20(5)：24-25、日本旅行協会	1943.5	新潮社
124	比律賓奥地紀行（其一）	南洋資料第302号	1943	南洋経済研究所
125	比律賓奥地紀行（其二）	南洋資料第320号	1943	南洋経済研究所
126	比島独立後指導の諸問題	『海を越えて』6(10)：3-17	1943	日本拓殖協会
127	南方圏の文化	『南方年鑑』南方年鑑刊行会編	1943	東邦社
128	三十八年の昔	『比律賓情報』第78号：13-17、比律賓協会	1943	
129	民情と土俗	『南方圏綜合講座』第2巻、東京商工奨励館 編	1943	研進社
130	フィリッピンの実相と再建	『南方新建設講座』237-239、南方圏研究会 編	1943	大阪屋号書店 ＊南洋経済研究所
131	ニユウ・ブリテン島	『時局雑誌』3(1)：52-53	1944.1	改造社
132	イフガオの水田：南方—農耕文化	『民族學研究』2(1)：165-190	1944.1	
133	臺灣とフイリツピンの理蕃政策（完）	『南洋經濟研究』7(1)：53-58	1944.1	南洋經濟研究所
134	海南島の民族	『南洋經濟研究』7(6)：15-19	1944.6	南洋經濟研究所
135	レイテ島とはこんなところ	『週刊少國民』3(45)(129)：8	1944.11	朝日新聞社

136	太平洋諸島伝道事業の概要（翻訳）	T. W Burton	1944	南洋経済研究所
137	フィリッピンの民族	『南方文化講座』第３ 民族と民族運動篇、南方文化講座刊行係 編	1944	三省堂
138	民族上より見たるフイリピン	『新生フィリピン共和国』大阪南方院パンフレット第８輯	1944	大阪南方院 ＊民族學研究家
139	赫耶姫（フイリピン）	『大東亜民話集』朝日文庫91、朝日新聞社 編	1945	朝日新聞社

表２　肩書と海外調査

年	肩　書	期間	海外	肩　書
		1905～06年	フィリピンで昆虫採集	
		1906～08年	香港	三井物産香港駐在員
		1912～18年	マレー半島でゴム栽培に従事、ジョホールで現場監督	南亜公司
1916	大倉孫兵衛商店南洋係	第１次世界大戦中	インド、ビルマを旅行（？）	
			ジャワ島スラバヤ市に４年居住（？）	
1922	極東護謨株式会社代表社員			
1929	南洋協会嘱託	1929年	ジャワ、小スンダ列島	
1930	南洋協会嘱託			
		1932年	スンダ、チモール、ジャワ、セレベス（２～５月）	台湾総督府嘱託
1934	南洋協会嘱託			
1937	南洋の研究家	1937年	フィリピン・パラワン島、ルソン島調査（３～５月）	台湾総督府嘱託
		1937～38	フィリピン・ルソン島北部・中部（12月～1938年４月）	台湾総督府嘱託
1938	南洋協会嘱託			
1940	南洋経済研究所嘱託			
1941	南洋経済研究所嘱託			
1942	南洋経済研究所嘱託 明治大学講師			
1944	民族学研究家			

3　フィリピンでの土俗研究

日本の近隣地域にかんする学術的調査は、国防問題とかかわる切実な関心事であったが、やがてその目的は多様化し、近隣の地域だけでなく南方にも関心が向けられるようになって、明治の半ばごろに海外移民を推進する動きと共に「南進論」として活発化したという〔山路 2006〕。しかし戦前・戦中の東南アジアの研究は、国策調査・研究機関によるものが多く、そのほとんどは一般向けの産業や政治・社会事情の紹介で、植民や移民促進のためのものであった〔堀井 1992：7〕。三吉のフィリピン訪問も当初は好奇心からの探検にすぎず、その研究もまたフィリピンの紹介や事情ものが多かった。しかし1941年から45年にかけての東南アジア諸国への「占領政策期」になると、三吉の著述の内容も大きく変わっていく（表1）。

三吉はフィリピンへは５回渡っているが、当初のフィリピン行きは、必ずしも純粋な学問的見地からとはいえなかった。しかし、５回のうちの３回は台湾総督府の委嘱のようで、その目的は台湾の「高砂族」とフィリピンの民族とが「土俗学」的、言語学的に同一の系統にあることを実査するための「探検旅行」であり、往復の度ごと台湾に立寄って台湾の「蕃界」との比較を行ったという。ここで彼が調査したのはルソン島北部マウンテン州の「高山蕃地」やネグリートの居住地、パラワン島などであったが〔cf. 三吉 1942d、1942e〕、1937～38年の台湾総督府の派遣にかんしては詳しい行程表が残されており、それによると台湾の台北から高雄 → マニラ → サンボアンガ（ミンダナオ島）→ ダバオ（ミンダナオ島）→ マニラ → アパリ（ルソン島北端の港町）→ バタン島 → アパリ → マニラ → 高雄 → 台北のルートを1937年12月12日より1938年４月14日まで４カ月にわたって踏査したことになっている〔台湾総督府档案第10252冊第10件第５張、６張〕[8]。台湾では、1910年から30年代にかけて台湾総督府を中心とする南洋調査が行われたが、その調査活動では民間団体である台湾銀行と南洋協会の果たした役割が大きく、この南洋協会は、1912年に当時の台湾総督府民政長官とシンガポールでゴム園開拓に従事していた井上雅二が出会って南洋懇談会を発足させたことに始まるという〔横井 1998：45〕。前述の通り、三吉が1912年に入社した南亜公司は井上雅二の意見で創業されたものであり、ここで井上と接点があったと思われる。また井上は、ダバオの麻栽培への関与や、南洋協会の支部をマニラとダバオに設け、比律賓協会の役員を務めるなどフィリピンとのかかわりも深い[9]〔三吉 1941：1-2〕。

いっぽう1941年にアジア太平洋戦争が勃発すると、「一億の民はすぐにフィリッピンにたいして関心」を持ち始めるようになり、そこで1942年に三吉の『大南洋地名辞典比律賓篇』（南洋経済研究所編）が刊行されると「比島に関する正しき認識が与え

られ」、やがてフィリピンに興味をもたないものは一人もいないと言ってよいほどになったという。その結果、三吉のフィリピンにかんする著書や論考、講演の記録などが続々と公表され[10]（表1)、やがて彼は「土俗研究」の権威へと祭り上げられることになっていく。先に述べたように、フィリピンは長期にわたってスペイン、アメリカの植民地支配下にあったため、これまで日本による調査研究はあまり行われて来ず、あってもその多くは一般向けの産業や政治・社会事情の紹介で、植民や移民促進のためのものがほとんどだったので〔堀井 1992〕、三吉によると当時、日本には「これまで南方に関係ある土俗学講座がなく、最近になって台北帝大に『南方土俗學』という機関雑誌が発行されたが、これは台湾内地の土俗や習慣を研究するものに過ぎず、南方諸民族にたいする土俗学というのは全く閑却されていて、おそらく自分だけがそれをやっていた」のだという〔三吉 1942i：27〕。

清水によると、戦時期、政府軍部は戦争遂行のために国家のあらゆる資源を総動員し人文社会科学にたいしても「学術動員」を働きかけたが、この際、民族学（人類学）の分野では、その内部から国家に働きかけて民族学の総動員体制を組織したものと、民間からの学術動員を意図した太平洋協会による動きとがあり、後者の太平洋協会では、民族学者を含む多数の研究者を動員し、東南アジア太平洋にかんする多数の出版物を刊行していた。この両者の違いは、前者が「専門的に民族学を学習した人」によるもので、後者の編集企画にかかわった人たちは民族学の「素人」であったが、実際には、出版物に民族学的な概説を寄稿した人々は記事の素材の大半を欧米の文献から得ており、両者に大差はなかったという〔清水 2013〕。これに照らしてみると、三吉は後者の流れに位置する「専門的に民族学を学習した人」ではない「素人」だが、三吉は土俗学について「人類学と人種学、考古学、解剖学、言語学などを組合せて、人々の現在の生活状態を調べること」がその本来の使命であると考え、「目の前に見える現実の生きている学問」が土俗学であると定義しており、一国を統治するにはその国の固有する土俗学を知らなければならないと考えた〔三吉 1942i：27〕。また、三吉は実際、著作や論考を書く際には多くの資料を外国語の文献に求めていた。これらのことからすれば、その目的はどうあれ、三吉の研究は、坪井のいう土俗調査の3つの利益に相通ずるところがあると考えられる。しかしフィリピンへ昆虫採集や探検ではなく、台湾総督府の委嘱によってフィリピンへ赴いた少なくとも3回の調査の目的は台湾の「蕃界」との比較であり、その研究には日本が領有した台湾に住む「生蕃」とフィリピンの先住民双方に同じ差別的な視点が潜在しており、彼の著述には「高蕃」「蕃族」「蕃人」「土人」「土民」「土着人」「野人」「野蠻人」「入蕃」「熟蕃」「蕃界」「土語」「土俗」といった用語が散見され、また、両者の比較の結果、台湾の「生蕃」とフィ

リピンのマウンテン州の「蕃族」との間には、言語、風俗、芸術、その他、極めて一致しているものが多いという結論に達した〔三吉 1938：8〕。そして「フィリピンは地理学的にも、民俗学的にも、生物学的にも「わが台湾」と一葦帯水の間にあって全く同一の見解に置かれるべき位置にある」と考えた〔三吉 1942g：序文１〕。

いっぽう、戦時下の三吉もまた、「総動員」された他の研究者たちと同じように、「輝かしい戦捷によって（中略）南方諸民族を欧米の枷から解放し、彼らを正しく指導すべき日が到来した」と自覚するに至り、フィリピンの将来は「指導宜きを得れば必ず大東亜の兄弟として共榮圏の建設は疑い」ないが、指導者がその土地の民族や習性とを十分に知らなければ結果を成し得ないと考え、自らその情報を発信する役割を担うようになっていった〔三吉 1942g：序文1-3〕。

三吉からすれば、スペインやアメリカのフィリピン支配は「本来のフィリピン人を東洋人の本質から全く骨抜き」にしてしまい、「野蕃なる紳士」「着物を着た猿」のような不可解なフィリピン人を作り上げたと見なされ〔三吉 1942h：序文２〕、「軽薄な、上調子なアメリカ化したフィリピーノを比律賓人と見るは早合点であって、民族学者や土俗学者は、遠く足を呂宋島の山岳州（筆者注：マウンテン州のこと）に入れて、先住蕃族と親しく接して見るがよい。そうしたことによって、本当の比律賓人の真意が判る」と考えたのである〔三吉 1942d：4〕。また三吉自身、「比人に多くの知人を持っている。併しその知人は概ね野人であって、いわゆる政策の大立物や弁論家の中には知人がいない。そういふ者の中に知人がなかったればこそ、眞の國民性を私は知っている」のだと断言している〔三吉 1942g：4〕。

おわりに

三吉は、フィリピンには非常に進歩したキリスト教徒から、最も低い文化を持つ「未開のもの」までおり、このうちネグリートは「兵役、教育の義務も納税の義務も戸籍もなく、この人間の屑、いわゆる世界人類の中で一番文化的に遅れている人」で、ウースター[11]のいう「類人、人間以下」〔Worcester 1906〕に相当するとした。またフィリピンではスペイン人とフィリピン人との間に生まれた「あいのこ」が多いが、政治の中心勢力者、有産階級のほとんどがこの「あいのこ」で、この「あいのこ」と、非常に進歩したキリスト教徒と、それ以外の「原始文化」を持った者とをすべて「フィリピン人」というと非常な間違いを起こすので「近来、学校においても情報局においても文部省においても土人という言葉を使うな、あいのこという言葉を使うな」としきりに言っているが、これらのうち一方をフィリピン人、他方を「土人」と呼んでも

よいと主張していた〔三吉 1942b：13-16〕。

こうした「土人」「土俗」といった表現にたいし大倉は、「「土俗学」は今日的には用語として定着しており差別的意味合いはないとしているが、それは差別される側の発言ではなく、その用語を使って差別する側の発言であって、かつて平野が「一般に原住民を「土人」と呼ぶことは侮辱を感ぜしめる〔平野・清野 1942：223〕」からその使用をやめるよう提唱したこと、「北海道旧土人法」の問題等を考え合わせるとかなり問題のある言葉である」と主張する〔大倉 2001：133〕。日本民族学会（現：日本文化人類学会）の研究倫理委員会が取りまとめた「研究調査において直面する諸問題」にも差別語の問題があげられているが、それによると「蕃社」「蕃族」「生蕃」といった野蛮性にかんする表現はもはや使用が許されないが、「土地の人」という意味の語彙で差別語となる「南洋の土人」も使うべきではないとしており[12]、これについては今さら議論するまでもないだろう。

三吉も含め、戦時下「学術動員」された人々は戦後、周囲を取り巻く環境の大きな変化を経験することとなり、人類学は「戦犯の学問」という烙印〔石田 1967：17〕を押されながらも、やがて民族学者たちはその再建を開始するが、戦時期に外部から民族学に接近した「民間からの学術動員を意図した」人たちは、民族学をまったく顧みることなく、それぞれの道を歩いて行ったという〔清水 2013：70-74、78〕。先に述べたとおり三吉は後者の流れの中にいたが、当の三吉は戦後、日本の石仏研究へと大きく方向転換をし[13]、日本の民俗について執筆活動を続け、100歳の誕生日の前日に亡くなった〔小川 1984：176〕。

三吉は、「民間からの学術動員を意図した」人たちの動員により、戦中、南方の情報を発信し続けたが、たとえそこに差別的な視線が潜んでいたとしても、そのなかで、本当のフィリピン人の真意を理解するためには「アメリカ化したフィリピン人」ではなく「先住蕃族」と「親しく」接しなければならいと主張し続け〔三吉 1942d：4〕、フィリピンの政策の大立物や弁論家の知人がいなかったからこそ、眞の國民性を知っていると断言し〔三吉 1942g：4〕、自身の土俗学を貫いたといえる。

＜注＞

1．当時、東京大学理学部の学生であった坪井正五郎ら10名が1884年に結成した「じんるいがくのとも」という団体が、1886年に機関誌の第１号を出版し、それと同時に会の名称も「東京人類學會」に変更された。機関誌の名は時期によって『人類學會報告』(1886)、『東京人類學會報告』(1886～1887年)、『東京人類學會雑誌』(1887～1911年)、『人類学雑誌(Journal of the Anthropological Society of Nippon)』(1911～1992年)、現在は『Anthropological Science』(1993年～）と異なる（日本人類学会HP：http://anthropology.jp/about/history.html、2018年５月29日アクセス）。

2．注１参照。
3．三吉の『東亞共榮圏と比律賓』(井上民族政策研究所研究叢書第一巻、刀江書院（1941年)）の井上雅二による序文より。
4．桜美林大学の中生勝美先生よりご提供いただいた。
5．小川氏の内容〔小川 1984：176〕とほぼ同じなので、ここからの引用か。
6．三吉の渡航経験について詳しく時系列的に述べられているものの存在について筆者は把握していない。そのためここでは、彼の残した業績や彼の紹介文の中からこれを拾い出してまとめている。そのため必ずしも正確であるとは言えない。
7．本業績一覧は、筆者が国会図書館に所蔵されている三吉氏の業績を検索してまとめ、それから漏れていた、筆者が把握しているいくつかの業績を加えて作成したものであって、残念ながらすべてが網羅されているわけではない。なお筆者が現在、所有しているのは網掛けをしているもののみである。一覧では、かなりの量の業績があるように感じられるが、実際には内容がかなり重複している。
8．注４に同じ。
9．三吉はこの南洋協会と長年かかわっており、三吉の『東亞共榮圏と比律賓』(1941）も、井上雅二の井上民族政策研究所研究叢書の第一巻として出版されている（注１）。また三吉は、ジョホールに滞在していた時、この井上のために「セシル・ローズ伝」を翻訳したという〔小川 1984：176〕。セシル・ローズはイギリス人で南アフリカのケープ植民地の首相となり、イギリス帝国主義を押し進めた人物である。
10. これらのなかで民族学（人類学）的な研究といえば、1942年に続けて公刊された『比律賓の土俗』(丸善)、『比律賓民族誌』(偕成社)、『比律賓の宗教と文化』(偕成社）などをあげることができるだろう。『比律賓の土俗』はこれらのなかで最初に出版されたものだが、そもそも「日記のように綴って置いたものをそのまま、手を入れずに」出版したようで、アジア太平洋戦争が起こってからこの種の書物の必要が八方から叫ばれてきたので出版に及んだのだという〔三吉 1942d：5〕。
11. アメリカによる植民地統治期の統治の中心におかれたのはフィリピン委員会で、この委員会でフィリピンの人々を政治的、文化的にアメリカに統合するための政策を積極的に遂行し、その一環として、まだよく知られていなかったフィリピン諸島の山岳地帯や僻地に住む非キリスト教徒やムスリムにたいする調査が行われた。これにかかわったウースターはフィリピンの人々を ①ネグリートNegritos：類人、人間以下（subhuman)、②インドネシアンIndonesians：身体的にはネグリートに勝り、北部ルソンとミンダナオに居住、③マライ Malays：低地キリスト教民、の３つのカテゴリーに分けている〔Worcester 1906〕。
12.「日本民族学会研究倫理委員会（第２期）についての報告」『民族学研究』57(1)：70-91、1992より。
13. 紙幅の関係上、ここでは戦後の業績一覧は割愛するが、概観してみると1960年代ぐらいまではフィリピンなどの「風習」「風俗」などの記述もあったが、それ以降の研究のほとんどは石仏にかんするものとなっている。

＜参考文献＞

石田英一郎
1967 「人間を求めて―文化人類学30年―：民族学から文化人類学へ」『石田英一郎全集４』筑摩書房。
大倉潤
2001 「南方植民地の考古学・人類学的研究―太平洋協会と清野謙次をめぐって―」『土曜考古』25：115-135。
小川博
1984 「三吉朋十氏の訃報」『東南アジア―歴史と文化』13：176-177。

佐谷眞木人
2015 『民俗学・台湾・国際連盟―柳田國男と新渡戸稲造―』講談社。
清水昭俊
2013 「民族学の戦時学術動員―岡正雄と民族研究所、平野義太郎と太平洋協會―」『国際常民文化研究叢書4 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学』17-82。
相馬拓也
2010 「考古学史における差別と支配のボキャブラリー――アイヌの近代をめぐる考古学とコロニアリズムの前線から―」『比較考古学の新地平』菊池徹夫編、同成社。
曽我部一行・及川 祥平・今野大輔
2007 「『人類学雑誌』考：民俗学の揺籃期」『成城文藝』201：119-72。
丹野勲
2017 『日本企業の東南アジア進出のルーツと戦略―戦前期南洋での国際経営と日本人移民の歴史―』同文舘出版。
坪井正五郎
1890a 「パリー通信」『東京人類學會雑誌』5（47)：100-116。
1890b 「ロンドン通信」『東京人類學會雑誌』5（54)：374-378。
1893 「通俗講話　人類学大意(続)」『東京人類學會雑誌』8 (88)：424-428。
1894 「土俗調査より生ずる三利益」『東京人類學會雑誌』9（95)：170-173。
1895 「人類學の部門に關する意見」『東京人類學會雑誌』10（114)：461-466。
中村淳
2001 「＜土人論＞―「土人」イメージの形成と展開」篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房。
土方久功・須藤健一・清水久夫
2014 「土方久功日記Ⅳ」『国立民族学博物館調査報告』124：3-572。
平野義太郎・清野謙次
1942 『太平洋の民族＝政治学』日本評論社。
堀井健三
1992 「日本の東南アジア研究史瞥見」『東南アジア―経済』地域研究シリーズ 5 ：7-12、アジア経済研究所。
三吉朋十
1916 「南洋貿易の有望品」『実業の世界』13(20)：47-51、三田商業研究会。
1938 「比律賓の高山蕃を語る」『南洋懇話会 速記録』7-46、南洋懇話会。
1940 「南方共榮圏と日本民族の發展」『東洋貿易研究』19(12)：25-46、大阪市産業部東亜課編、大阪市産業部。
1941 『東亞共榮圏と比律賓』井上民族研究所研究叢書第一巻、刀江書院。
1942a 『大南洋地名辭典比律賓篇』南洋経済研究所編、丸善。
1942b 「大東亞共榮圏内の民族」『日本と世界』188：1-42、日本文明協会。
1942c 「支配階級の諸族」『フィリッピンの自然と民族』第 2 部 民族、太平洋協会編、河出書房。
1942d 『比律賓の土俗』丸善株式会社。
1942e 『パラワン・チモール・セレベス探検記』刀江書院。
1942f 「南方の文化と生活（一)」『通商彙報』420：2-7。
1942g 『比律賓民族誌』偕成社。
1942h 『比律賓の宗教と文化』偕成社。

1942i　「南洋の諸民族に就いて」『経済倶樂部講演』12：27-45、東洋経済新報社出版部。

1942j　「南方への指針」『南方を解剖する』日本学術探検協会編、元元書房。

1942k　「南方圏の民情土俗に就て」『南方圏の諸問題』93-106、日本護謨輸入組合調査課。

1943a　『東印度の土俗』日本公論社。

1943b　『比律賓奥地紀行（其の一)』南洋資料第302号、南洋経済研究所。

山路勝彦

2006　『近代日本の海外学術調査』日本史リブレット、山川出版。

2011　「日本人類学の歴史的展開」『日本の人類学』山路勝彦編著、関西学院大学出版会。

横井香織

1998　「南洋協会台湾支部と台湾総督府」『東洋史訪』4：44-50。

Worcester, D.C.

1906　The Non-Christian tribes of Northern Luzon. *The Philippine Journal of Science* 1-8：84.